

弦本拾遺信長記

前篇

十一

特別
13
2507
11



門 遠
号 2507
卷 23-11

繪本拾遺信記初篇卷之十一

目録

鈴木孫市郎燒天王寺陣所事

鈴木龜安天王寺の陣(仍て兵糧を運ぶ)

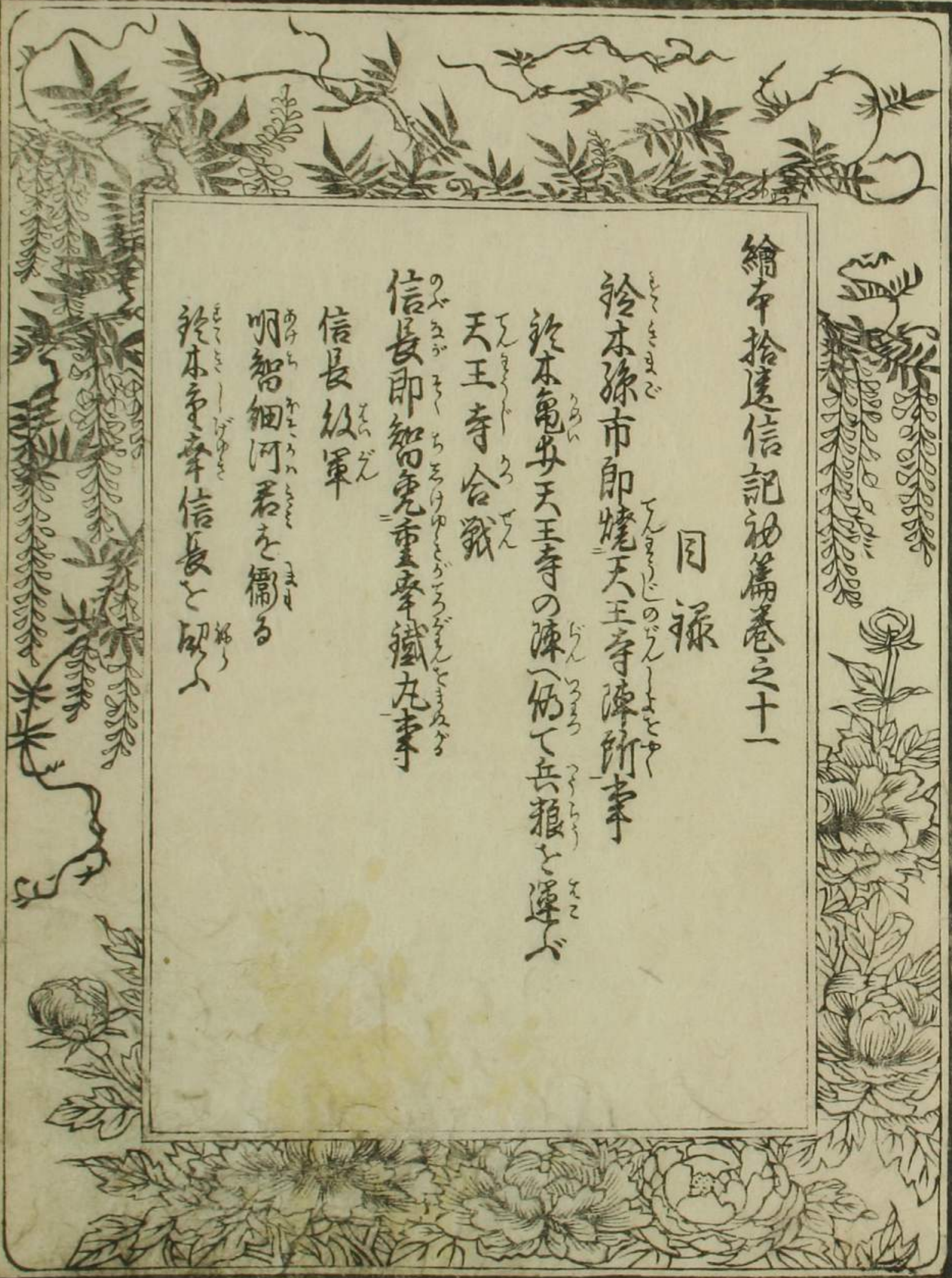
天王寺合戦

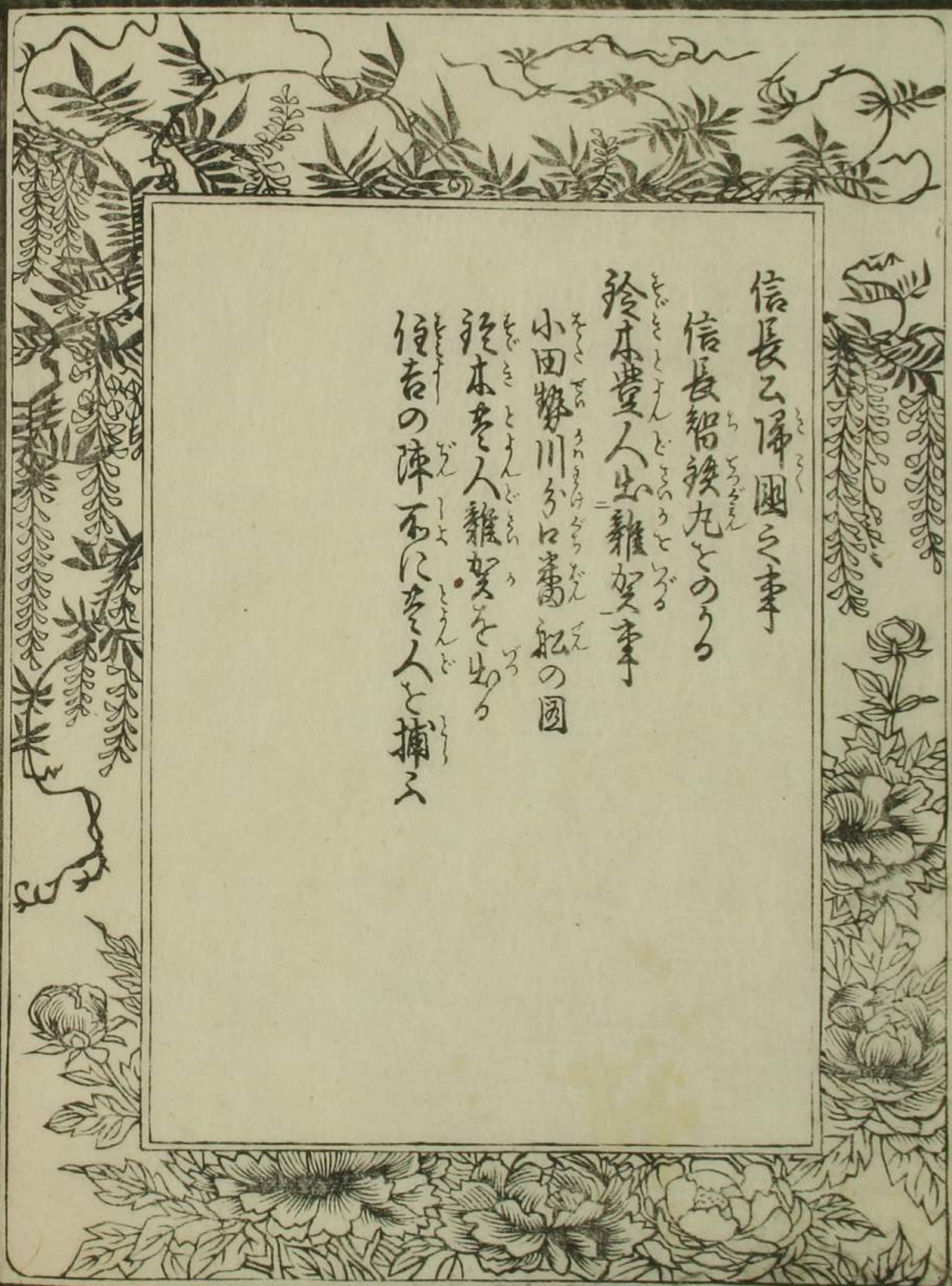
信長即智免重幸鐵丸事

信長攻軍

明智細河君を備ふる

鈴木重幸信長と関入





信長之帰國之事

信長智鉄丸とのり

珍本豊人出難賀事

小田勢川分は高松の國

珍本を人難賀をわ

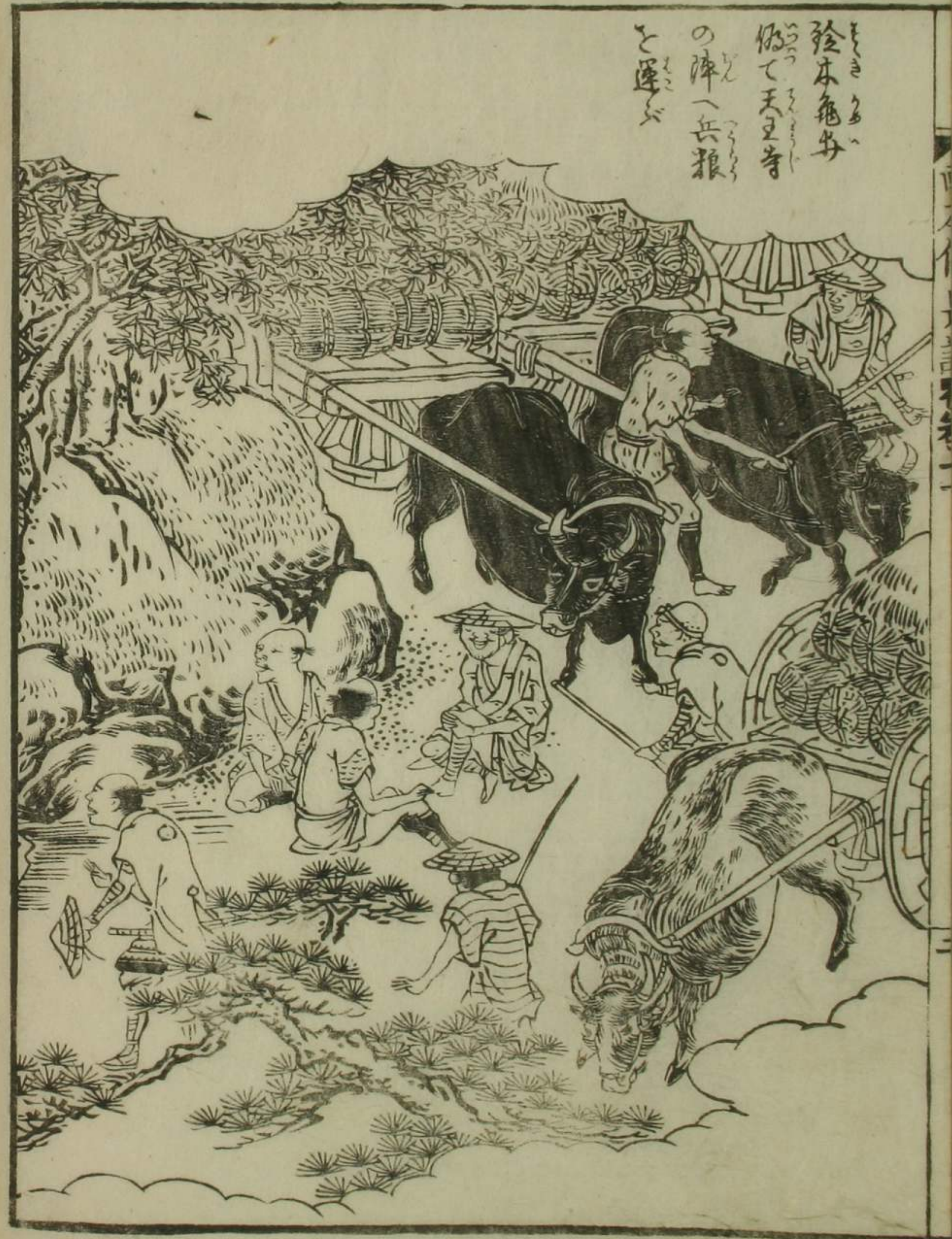
信吉の陣石に冬人と捕ふ

繪本拾遺信長記秘卷十一

珍本孫市即焼天王寺陣所事

叔は討石山の軍は珍本孫市即龜井六郎西人の軍師
 重幸が計策を飲一疾を日と終る紀州の難賀郡より
 おのが故郷をわが書に後敷し此所に備り明善寺親寺の
 候りのことを待居たりと珍本龜井を元より不双の強傑
 うれは石山と捕殺し其討つる家成志と書ると見ると
 我身命と工人へさげ粉骨細末を軍忠とさげと
 ぬきばさる強くと我家へい書信りく重幸が下あ
 陸の難賀の百姓三百余人をかさるの牛馬とよ二十
 余足づを集め柴薪草菅の敷よ育英燭燭とそき





うけ兵糧米の儀物のどく志向らひ車又積て被牛馬の
 牽せ紀州根来より運送せる根来乃よし被置し信長が
 天王寺の本陣にして據らひて急ぎなるけ附信長云石山
 の城へ自ら押寄せ毎二五三と責給人と珍本重幸が斗略
 して三番度専坊と別如上人よ出させ矢倉も及なり音楽
 よはとく沖和漢を懐備しこれが考ひの軍勢我らぞれ
 氣勢しぬけそ海と陸表の隙よむせびくろ信長怒
 て烈しく下知し只一母り此のり入やとめをりもせり
 給人と日よるや黄昏らうく諸軍英氣を失ひぬと
 じし乃信長能く計略を唯あきらめたる斗り
 きて此日のうき方珍本孫市亀舟六郎天王寺の本

陣よあり紀州根来乃百姓信長云の沖下知は陸の兵糧運
 送し来りうと鳴りわらふ本陣の守衛宅間甚九郎款
 の漆斗とは着にまき火に焼びま出しく詞をうけ汝
 等遠き妙術と勞とせ代なるく糧米を送り来るは津
 州のよりこをく陣中へ運び入せ候て君の沖陣陣を結
 うけ沖獲詞小取明朝後く陣中とてしとく陣中の雜兵
 よ下知してかの兵糧と入んと孫市人より先よと出
 る軍場の驅引よ岷岷外給うんけ兵糧乃一件のれ共
 よ沖まうせと三百余人の百姓もてんで儀物とてい入
 附尅のまろ成給居り信長云の今日乃城表と款のな御
 よ論り兵糧皆重幸と考ひ五人合らうり軍勢とまど先



圖本傳長言神卷十一

四



天王寺
合戦

圖本傳長言神卷十一

四

天王寺の本陣にして引去珍本孫市龜井六郎遙よ
 此陣と見ゆく附かいはしとわらむこそ何と積重縁る儀也
 へ一日よと門と火と附しよ火業八方よわらばし里建る人ぶら
 陣屋く一日よ闇と燃よきは本陣の守護人宅間基九郎
 こい何よりと刀引さげ証出よばるやに方より闇の影移しく
 起り建烟の中より切先とそろ人教花徹麿よ斬る門よは
 殺て一人も戦んととる者るく皆殺されよ右健九郎へ逆形
 わらふ討る者殺を志すは信長とろく小け火先と見ゆひ
 とは本陣よ款の切のくそ是面ぞ証向ふと蹴らるせよと
 惣軍報よ健と合せ一多にうけさる珍本孫市龜井よに
 るるれは信長軍勢を引て馳来るとりてくがれは軍勢ありし

牛どもりの脊よ火業は仕込し儀と結ひ付火を付てとら
 たり小忽燃火に方八面よ飛んで牛の惣めと焦るわらは何
 ろんでたまりんき三十余足の積物牛ハ若と燃りて信長が陣
 中へ素二文字に証入雜兵士卒のきりひるく角よりけに只り
 蹴る東西よ地南山よ交り七將八側して想ふわら小信長が熱軍
 火牛のわら小撥丸よと底と若かりも足を焼よ是陣後陣小荷結
 の陣さんぐりり何とさるは具足よ焚うも死とる若らわ
 らる珍本孫市龜井六郎得さるかじととまきよ八十余
 人の還乘と後へ自ら素槍と引ととき火の光の其の中より押つ
 と鳴りて突まきよは軍よりさる小田の兵士も戦ふべきなだて
 と其の兵素槍刀も大地よ投して後よりお移るるたいとま

うく右様虎継に逃ぐりくるけ付石山の城申より三番定専坊
と大ねと「堀の坊頼恩寺八本後河守三子余誘大子の城戸を
推用き小田勢の後より一夜の懸波と仰り報丸のそとと移る
くく只一糸に討てうり一言の同言に及びび當りをあに
斬之突立とらむと小田の軍兵庇を蒙者数ふ人とのく殺と
あつた大ね信長と今いふは」とおひつれは強兵又報打け戦
場を余はよ見ぬ」若江の城と志」唯一誘為らとるの押ひ
かけざる級軍をうり

信長即智免重幸鐵丸事

兵の原ゆ及かり鈴本重幸が火牛の一計忽小田の軍隘と切
崩しとじし強勢の信長軍誘みり級軍をれと人申り此強

勅うて日次ハ君命よ代り馬をの討死を心よりけし「旗本乃
勇士其外天下よ名と得る軍お極率し信長の在るを
あつた其身いと何とざる道とるのころいん落しうり」級軍
かりされども明智十兵衛光秀細河兵部を交差後澄兩人ハ
大ね乃河守心よりく眼とらがりかけおりしは信長の落り
給ふを大の光よ見ると信しとく兩人とも一誘延と河跡と引
添ふより信長の是とも款の追来るぞと心得いよく馬を
交らせりか明智光秀をうけ我君何条をたうり
交り給ふや今いふはや款合も遠くありてい人の河守は
て級軍をも集め給ふしとや信長をいよめてこころ
を安し馬ととめてうりこれハ光秀後澄の両ねうり安

信長
坂軍



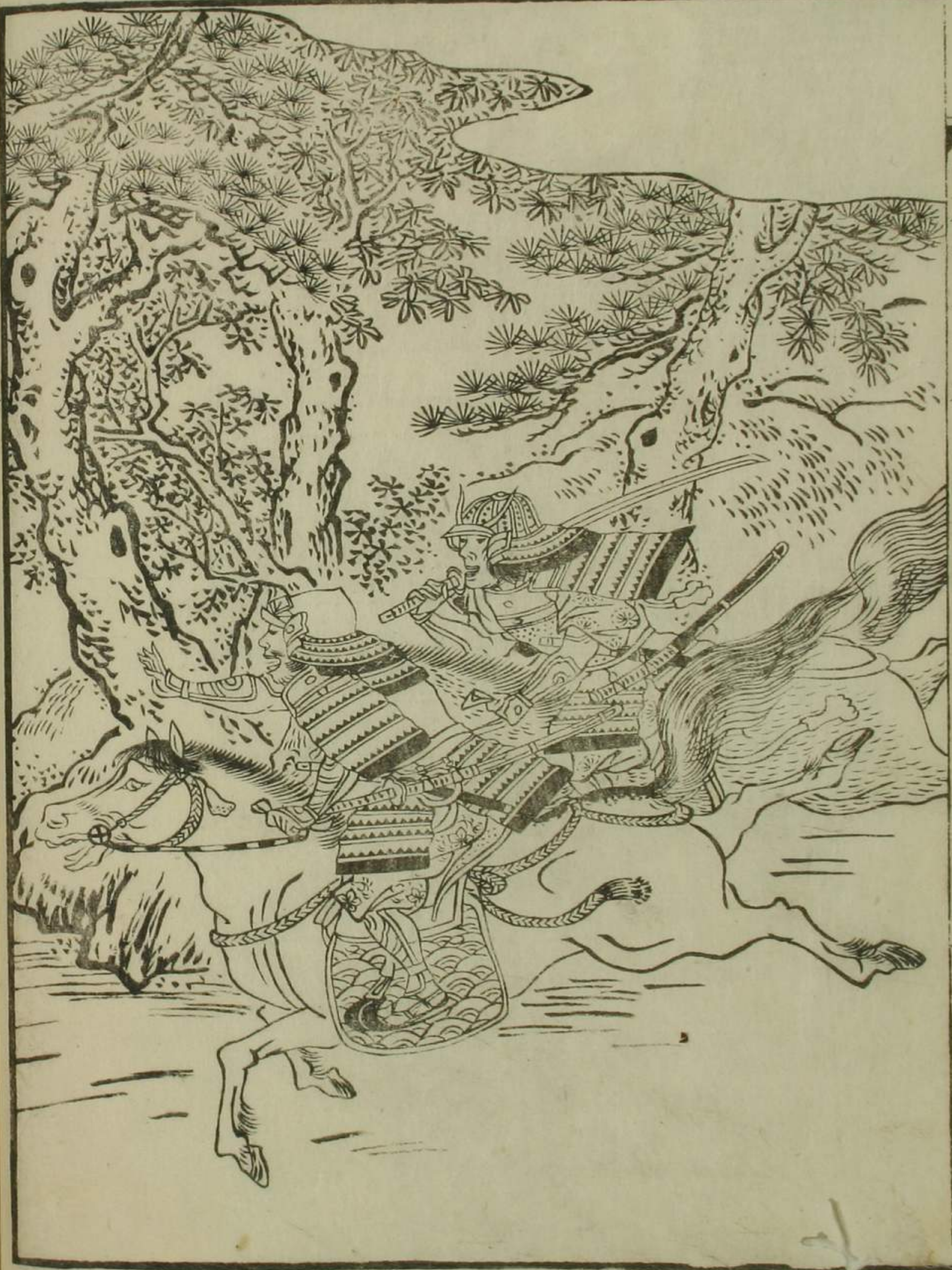
日本信長前初卷七

七

抑ひて勢ひ終つて限りなく至後三人馬の口とてうへへ愛は
留く休ひつる光秀の遙々天王寺の方と指さし一々やは
るいりて河内味方のお土石山乃軍師鈴木重幸が
濡に臨り陣を焼く兵卒と換じ今いへるかかぎるまき
級軍とこそえて以人其上と君の御幼勝心よりそとろよ
討死や仕らん細河兵部これよとい君の御守り何れも
つうひひき某一人天王寺より引りし君河内安徳の旨と福
安うせ級軍を集めやうけし不弛途じや此は「督御御
終りいへと言とまれば信長志と其條は同じ光秀も命
て級軍とまじしむ光秀の馬の尻を御小向け天王寺
の軍場へ一三二弛ゆりけ御信長馬とありて懸絶とて

居終ひしが忽ち夢を發して大に笑ひ終り細河及渡岡と曰く
君何れを笑ひ終りや信長若て我余の身を笑ふよとつ
此處御信長弓箭所をて天下の内は横切し強敵とて一
大團と併言せらるるいくもそぞや猶も小寺親孝の坊を
ら成おむに一かく級軍せらるる可笑うらば是れ我本親孝
をあるとてり輝んもろが成え又二つはは鈴木重幸と月
る小願法ありけり武士の佛は濡し坊を平家枝けり
蓋うたると又生渡と若しむも又抑じうらばや三つはは鈴木
重幸軍師と達し兵法と志しうと母乃人の稱嘆とれど
我れとてうらり小兜の下し燃重幸兵衛と委しくは
此に伏兵とそき我れを討べきにうらば臨りぬきと

明智細河
君治衛る



ことごとく匹夫又幾人なれば第一と其言ふはまご終るる小
 耳下又鉄炮の音と入と郷音き信長と馬より下へお逃しぬ
 細河兵部大木小登喜竹者の仕業うらや當の款のぐはま
 一と飛多のりてくけ巡と目よと入ざる款のうく自人の
 安否も心りてく弛入川へ倒れ給へる信長と枝け記
 河心怪とらせ給へ細河辰隆是より大木よ呼聲なき御
 息よりい〜と人心もつら給り候今うら〜と入たまふ
 辰隆いよ〜給へ急石をやおし給ひぬらんと麻口改は
 俣又股の外とおかき門へ痛も〜と入びこり措き河を換
 うるかばかりれお麻は正体なき河あるまふ大木乃石切又遊
 心と付させ給へやと二三度計り生れと唯息の音入り細〜と

頼も少き侍も〜と入辰隆元より才智勝也」若るれば信長
 云の謀計と推察し再び登き上り侍と成し無愆〜と
 英名に海は東き鬼神と呼と給ひ〜御大木も武運盡させ
 給ひ〜流丸と命と落し〜茶系に霜ときえ給へこそ是流り
 うれ河守の果かり〜と禮の神代歌を〜して大地よい
 正し〜をらけてぞ款き〜かく信長と一丸とお備」若を誰
 とうと入石山一城の軍師鈴木本源左衛門尉重孝之今雷天王
 奔の陣と燒討し信長と〜しら〜んと火の光と〜とその
 まゝ雜兵の侍も出ま〜給ひ〜竹搦げおひてより信長が御
 交るべきらせら〜ひ〜隠さ〜や〜と結る小椽又遠
 信長と〜侍も〜二三騎若の城を志し〜は〜と〜延〜を

頼木の隈尾の小麓より身をくし福の討又お落し身を
 毟びて中うけを伺ふは信長の配しうにて後陣が懸傷板の日の
 強敵と討強せうりと心は執びる巧みにしらんる困る方
 地中と潜り石山嶽へ降りたりは時先秀の天王寺の軍場は
 馳来り敷れせし味方の後軍とまどり下の兵士と下處
 て御大おの若に表と退き終へ同は場とおとそそやしく
 彼地へ馳集るべきのうへ八方の味方は獨知しせそめい勢
 又百余人を引合し信長云の御守護心えはしと再びるを
 引合し若にの方へ急ぎたりたるや疾し東を近き以らる
 の石にありしが細河後陣大に執び倒し討つる信長云の
 御前におもひつる明智先秀を勢を以て若守護しちる

ころあり若にの嶽へ入せ終ひ終る」と云とけし時信長漸と
 執より後陣先秀が勢と稱し馬引をせしお疎し若にの方へ
 急ぎ終へ先秀が又百騎の軍兵若守を右に押寄せ難く
 く若にの嶽し終へるとが信長軍は訓う貴雄をいれ終る
 かとうに馬より死にう待よりそそ世に死しは重幸信長
 を討箇」とおひ若とえんとおひしが細河後陣又若の
 けしに煙しく大おの首は我よんや治とらる信長と討
 又あり今既よ志の遂ぬるを若と求むる身はみけしんが
 首とえてし今は」と其後石より引えたり後陣あり信長の
 謀略を推し終り終敵のあ換を返し目よりんる敵乃伏兵を
 欺きし後ともは若にの嶽へ入るの例まけるる若智敵と



とよとあゆま
鈴木重幸
のふか
信長と
あゆま

信長とあゆま

土

笑者こそいふに縁ありし事

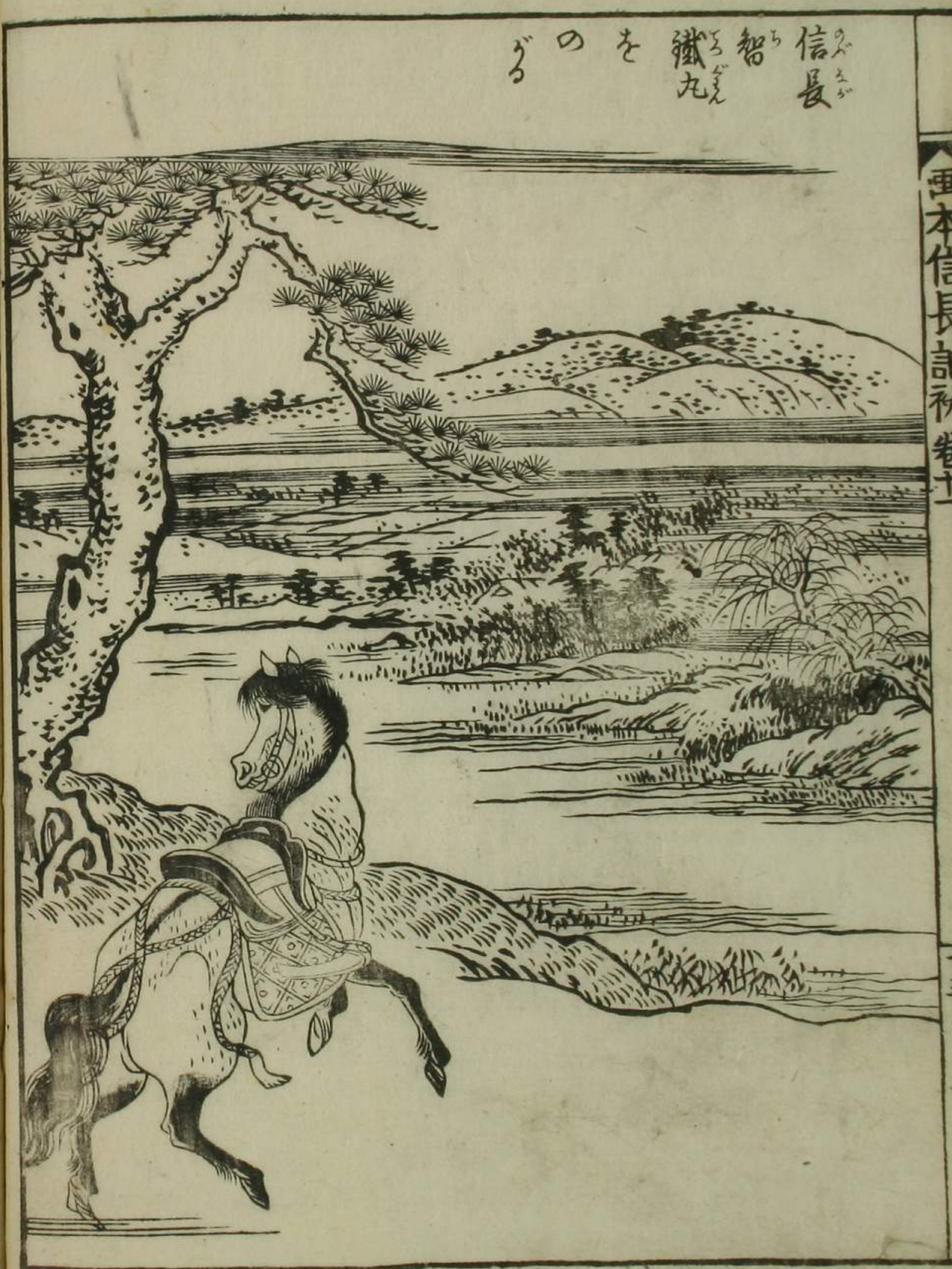
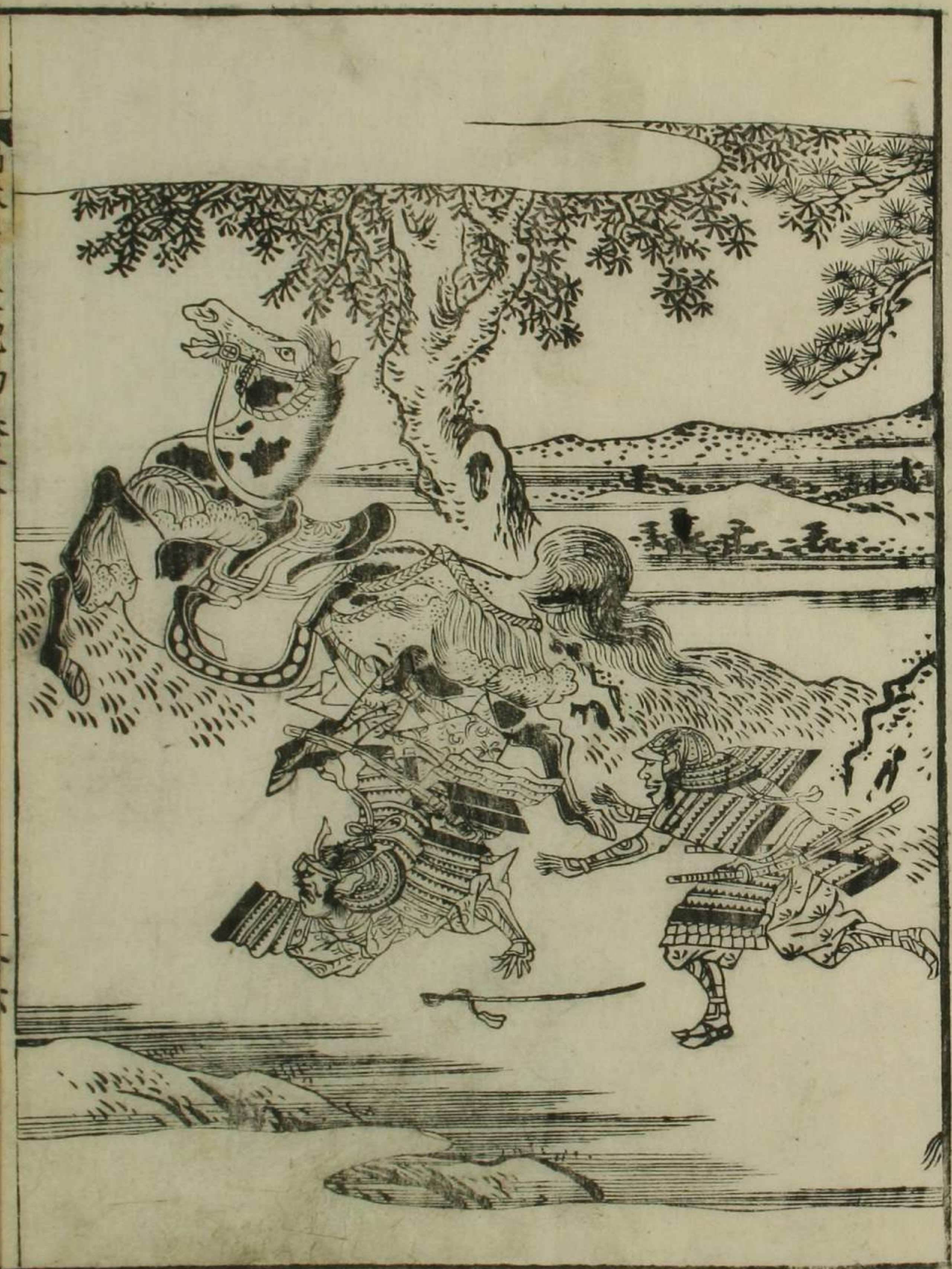
信長公降陣之事

天王寺には鈴木龜舟の支那藤我を以て小田の附城はるを一面に燒立に角八方は難立たるに於て一人も款とる者なく
あひく心くは遠く火と防んとしる者なくおぼし南風烈く吹て猛火天と焦し夏端地は救ひ石山本願寺の方え端の
飛り抄びて是より石山勢甚強き今にもに當るべき
款兵ははしとや火防ぎく不慮の事ひとのまよと諸軍一
日は水のひそくおう鯨波をあげ念佛と覺力と盡し防ぐたたい
つとく風も去りまう火勢もまよ良房くわうぬ天王寺も荒る聖徳
太子の末末記には教百歳の後我後身出世して是より山の方

石山は靈場と稱くばしと記し終ふとや是を以て考ふとは石
山本願寺の開基蓮如上人と云なるの聖徳太子の再来觀世
音菩薩の化身なりと云はれ佛は救世の靈場天王寺の伽
藍は燒去と云はれ石山本願寺の舎くせん聖徳太子の佛
慮ありが故に佛教信長軍致し本願寺勢火と防ぐ時に至
て南方の狂風忽とまう天王寺伽藍の因に燒去せしむ
つとく本願寺の恙なくして押はしつとく皆太子の押させたまふ
不ありしんといふ事乃老若いつとく之れ他門依宗の男女
まよ共いするまざる者もはしけし信長公の若の城を
破軍と集め終へて兵兵も退くと馳差軍勢皆太子を
換へ毛髮と燒去る事重なる者多しといふも討死と

る者稍少「信長教度乃我い又改換」今度の附城は石も殺
 多焼失ひ再び美考しりしは信長一は珍本重幸
 一人が石おふりなるは先城美とに「是いふは」して重幸は
 捕へ肩と削而して後城と美を「ま」とま「評議せしむけ
 」とに「つり」旋く「計略も」つり「諸お一日」又「け度」
 先河津園ありくゆく「軍勢と」潤へ「計議と」定く「重て」
 儀去り「し」と「勤め」せし「信長も」強て「我い」と「好く」再「び」改「せん
 かん」若「く」し「と」心「懸」し「給ひ」衆「議」を「降」陣「とは」定「め」たま
 ひ「ぬ」され「は」苗「圃」所「を」當「堅」固「と」命「せ」し「先」明「智」日「向」光「秀
 と」信「長」の「附」城「又」移「ら」せ「宅」間「右」邊「門」尉「又」子「及」天「王」寺「の」焼「焚
 又」は「石」山「麓」に「石」山「に」方「の」城「と」い「ひ」近「着」山「城」守「松」永「彈」正「又」子

あは監物池田孫治郎兼本松侍守山園孫三郎兼地子世
 多分始りし「多勢」の軍兵を新寺と遠遷「諸國」よりの道路と
 を防ぎ「先」伏「本」新「寺」の「毛利」家「と」因「源」の「り」たる「は」西「國」海「と」り
 往「来」こそ「第一」の「要」所「と」し「川」分「は」大「船」小「船」教「艘」を「浮」め
 鉄「炮」と「備」へ「槍」長「刀」を「飾」り「諸」子「の」番「船」皆「相」國「と」定「め」奉「り
 を」集「り」防「ぐ」な「り」用「意」な「り」又「信」長「の」候「に」は「足」掛「り」の「石
 を」構「へ」石「壁」修「内」間「猶」七「三」雲「傍」を「守」り「尾」崎「西」宮「は」池「田」中
 川「が」軍「兵」多「勢」を「と」固「め」今「は」十「分」又「諸」方「の」子「孫」り「定」り「し」ら「ば
 天「正」に「年」六「月」七「日」若「石」と「進」發「あり」く「い」及「安」去「り」降「臨」し「給」ふ
 本「新」寺「も」し「け」つ「り」さ「ま」を「見」く「備」へ「て」い「つ」は「し」し「し
 石」山「の」石「方」又「又」十一「ヶ」石「の」は「石」と「構」へ「本」後「河」守「津」田「去」佐「守」田

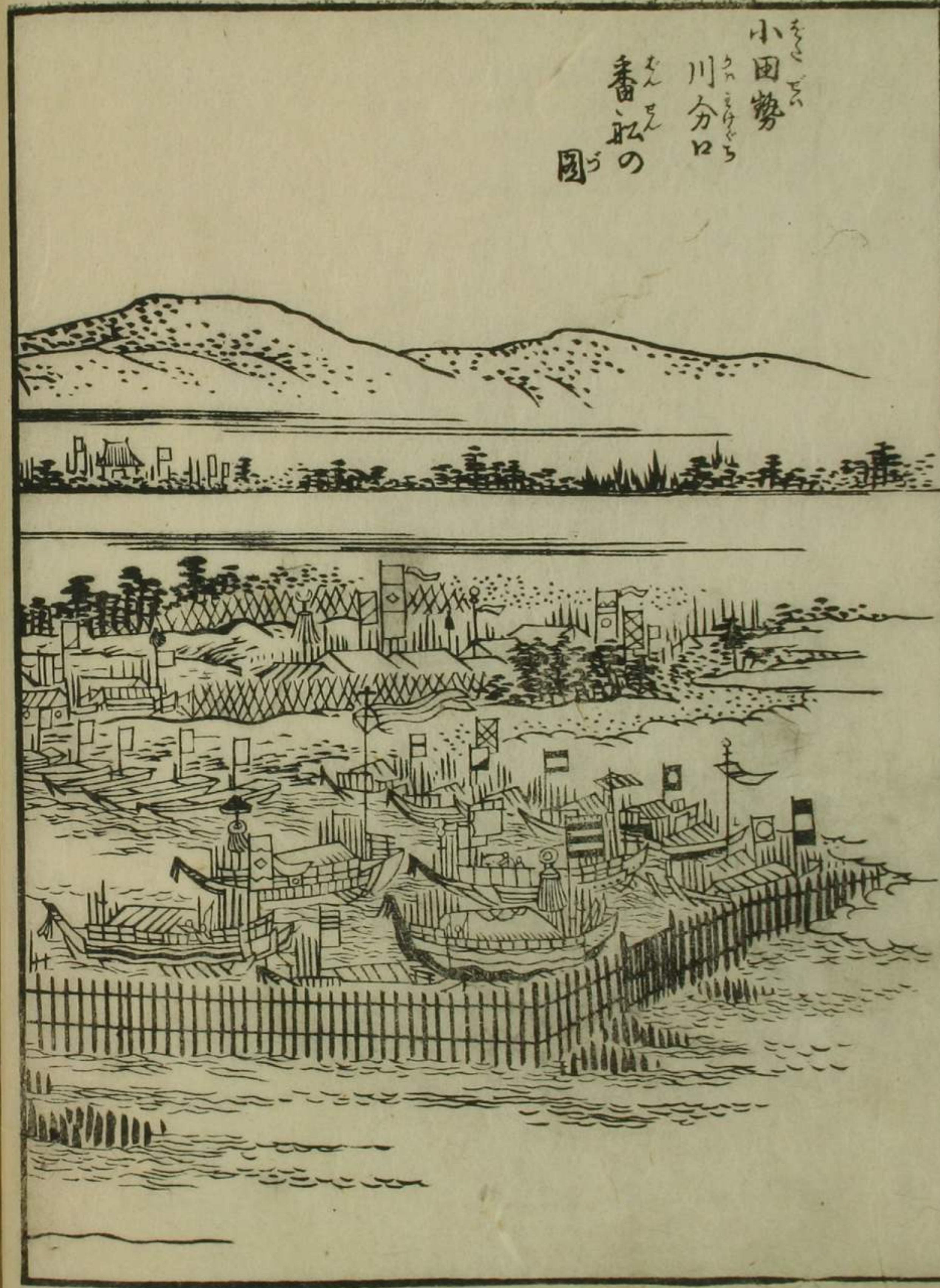


信長 智 鐵丸 を の づ

辺平治山田新成... 十郎次郎和歌... 報附のおとく... 紀州雑賀の... 信長云の補佐... 謀術武略... 曾て... と懲... のる徳... 人... 威... 称...

鈴木孝人出雑賀幸

安よ石山... うらの... を出... 此に... これ... 此... よ... 心... け... 僅...



小田勢
川分口
香取の
國

日本長崎

十七

十倍して父とあるりの洞之より附と老人候と母と母と母と
 中々の皇子が八歳の附父君家孤女と石山に築城し終ひ
 より朝夕又附跡の事とあるひ事とせ既と七年の年月と
 今いとも我父十に歳とありて父を以て武士の家と生と来と
 在父を戰場と並あうせ我父の安用として父に訪り竹面目
 と人又面と對し人きありれ今より附跡より石山と事
 て父とのちとも父の名をも取し生死と父と任せなうんと思
 ひ込で中々ふぞ母とあうとあうとこの押はしきりやと
 此のうら流石鈴木孫市が父とく雄とし其志を父君の
 せ終りてそぞや妹とく母に終りて併とくま孫市を奉
 附一味の附とくく我父のあひに武士の父の戰場と終り

家を志と妻子ととれして再び故郷へ帰らんや我父は母が
 主人と老人を養育し我があうと永く泳りよ自覚佛智
 の加護より法教を乞ふ宗門お續の附とくあ門て我い
 討死せぬ其附めでく再會とくし確に教十年の光陰を
 重るともおまに書信いとほきとと嚴重の仰と守り終り
 度のためよりせ終りて父との仰と遠ひ石山乃城とあり
 我こそ鈴木孫市が子よとやさんとは穰英の言ふお
 並と母のちとく又附跡や夢りぬらん其上けとく人の
 中流を渡く又小田の軍勢石山乃口方と教十ヶ所の附城
 とうま人多く軍兵と募て人の往來を止るとあり且しは
 敵方の擣とあり口惜きとと遂には父との勇氣と折け母



珍本老人
難空を
出る

歎きいひつゝ人石山は歎き父とてしよる名とせん附置はつて
 し心と志何れも前道よとく露電と歎きつるを人重てヤ
 多の一應御理といひ人少とも父の仰り我いまご八歳の孫子な
 るを命てちり忍ぶは少人も既二十に歳の年と積み婦女と
 日づく家の内は引籠り父の生記と余はよんていふも
 玄甲髪うく口惜きゆいせん方は「源右大お朝朝卿いませ
 十三歳よりせ孫御附御父義朝卿と仰る都と落させぬ
 しに馬よよ立て眠りて只一人泣くからと押しませ」とお武士
 等數十人ありて刺んとお尋ねりしは朝朝卿はしと寝き孫は
 此方引取りま向よと「かばし道考御武士三三人斬削し孫は
 奴を八方へ追まきり父の跡と志し」が孫は東國へ義兵とて

本曾の強敵と争げ卒家の二門と討はし源氏一統の代と仰
 孫はしと初き御より父との御物語り父より一白も志し孫は我朝
 朝卿より仰りいとも孫本孫市が二も忠孝に命と捨つり破は
 ちるまき背を捨つりり我女くおひ居りい若しお若御免し
 きりのろくは迷は切腹し武士の操は命と捨しと服着よと
 けぬるとおとがりて押とらう道しきつとヤつるよ先よりおが
 苗あつりしに初心は何れをうまやうんと心と引まん計るりを
 かくおひ借ぬるよ十重の園り百重の園も御つていよ出ま
 の用意とせんと然と何なり早夜と着せ業去者とな刀と秘
 百姓の神は仕立まはとと徳とてる筋守りのおふとて
 親軍聖人御美事九家の名号とりちてり小袋は納り肌は付



させ心強こゝろくこゝろしこゝろ出いせいせいぬいまいのい武ぶ士しのし素すもも子こもも後あよよつつけけぬぬるる
義ぎ勇ゆうのの心こゝろのの勢いきほししととくく人ひと舉あげげるる

繪本拾遺信長記初篇卷之十一終

